

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第22回 マウンテンゴリラとの遭遇—G & Gの旅

「ゴリラを観に行ったことはあるか？」と以前から多くのウガンダ人から聞かれておりました。前回の10年前の駐在と今回の2年近くの滞在と合わせるとウガンダ在住経験ほぼ5年になりますが、ウガンダ観光最大とも言える売り物のゴリラを観に国立公園を訪ねたことはありませんでした。ウガンダ駐在の大使という立場上一度は行かなければならない！と、常日頃から思っておりましたところ、遂に4月の1週末を利用してゴリラの一家族と会うことができました。藤枝市在住の旧知の後藤氏が友人を3人連れゴリラの住む『ブウィンディ国立公園』と『クィーン・エリザベス国立公園』で象やカバ、特に木登りライオンを見るためにウガンダを来訪するとサミュエル・ムギシャ（カンパラ通信第13回御参照願います。）から教えられたので、これに合流することにしました。

私にとっては4月20日から2泊3日の旅となりましたが、それを要約しますと、20日エンテベからアエロリンク社の飛行機に乗り、『ブウィンディ国立公園』に一番近くのキヒヒ飛行場まで行き、飛行場すぐ隣のゴルフ場で後藤氏にお付き合い願ってまずゴルフを楽しみました。ゴルフの後、木登りライオンを見に行っていた他の邦人3人と合流し、『ブウィンディ国立公園』隣接のシルバーバック・ロッジに行き、一晩過ごしました。翌21日はほぼ1日かけてゴリラ・トレッキングを十分楽しみました。最終日の22日はロッジからキヒヒ飛行場へ行く途中であって、サミュエルがボランティアで支援しているニヤカ・スクール（エイズ孤児が対象）を表敬訪問し、再びキヒヒ飛行場から飛行機に乗ってエンテベに到着し、カンパラの公邸に帰りました。ゴルフ（G）とゴリラ（G）との出会いを楽しんだB & B（ベッド・アンド・ブレックファスト）ならぬG & Gがどんな旅だったかを次に記します。



ゴルフ場の看板



ティーショット！

20日(金)午前6時半にカンパラを出発し、エンテベ空港に向かいました。朝が早いせい

か思ったほど混んでおらず、順調に7時半には空港ターミナルに到着しました。キヒヒ飛行場に向かうアエロリンク社の乗客11人乗りのキヒヒ行き軽飛行機は予定通り9時出発でした。同乗者の6人はいずれも欧米人でした。私も含め、みんなゴリラを観に行くという目でわかる恰好でした。機体が降下している途中で飛行場に隣接するゴルフコースやグリーンに刺さっている旗がくっきり見えました。ほぼ定刻通りの10時10分着でした。まずは、飛行場に隣接するガルバ・ゴルフクラブまで歩いて行きました。30分ほどするとサミュエルが社長をしているビック・トゥアーズのマイクロバスに乗って懐かしの後藤彰氏が到着しました。カンパラ出発の時からプレーできる恰好ができていた私は、後藤氏と一緒にマイクロバスに乗せてきた私のゴルフ・バッグを降ろし、ゴルフ靴を履いて早速第1ホールへ向かいました。このゴルフ・クラブに所属するジャスパーという若者が私達と一緒にプレーしてくれました。9ホールのコースですが、結構長いコースでした。ウォーターハザードは一か所だけしかなくて有難かったのですが、バンカーはそれなりにありフェアウェイも少し草が長く、ボールをリプレイスできることにしました。また、グリーンもあまり刈られてなくて強くパットしてもボールが止まりがちなので調子がつかめませんでした。8ホール目まで来たところで、サミュエルが連れて来てくれた残り3人の日本人(男性2名に女性1名。いずれも70歳以上の私より年長者であります。因みに後藤氏も70歳代の男性です。)が待っていてくれ、一緒に散歩しながらホールを回り終わりました。



パッティングです



上空から見るゴルフコース

すでに述べましたように、このゴルフコースは9ホールですが、グリーンに向かうフェアウェイを少し変えたり、ティー・グラウンドが二度目に回る時は異なったりしていて単純に9ホールを二度回ると言うよりは18ホール分楽しめるようになっており感心致しました。なお、面白いことにこのゴルフ・クラブは個人が所有しているということでした。プレー終了後は、5人でビック・トゥアーズのマイクロバスに乗り移動に5分もかからない程近くのホテル・サバンナへ行き、buffetスタイルの現地料理の昼食を取りました。1時間くらいで昼食を終えいよいよ『ブウィンディ国立公園』に向けて出発しました。観

光のおかげで潤ってきている感じがするブウィンディの町を通り過ぎ2時間弱でシルバーバック・ロッジに到着しました。ロッジは高い丘の上であり、向かいに密林になっている熱帯雨林に覆われている山が見えます。そこ全体が既に国立公園です。西の方の少し遠い山間に霧が立ち込め、将にゴリラが生息するに相応しいミステリアスな雰囲気醸し出す風景となっていました。ロッジはバンガロータイプの部屋で、清潔で整っていました。午後7時から夕食で、メインやデザートを選ぶコース・メニュー方式でした。私はゴルフスコアのことを思い出しつつ赤ワインを片手にメインにポーク・チョップを美味しくいただきました。その日は、旧知の友人と再会しゴルフと食事を楽しむという心地良い疲れのおかげでぐっすり眠れました。



霧にかすむブウィンディ原生林

21日(土)6時頃起床。部屋には電話がないので、目覚ましサービスはロッジのスタッフがドアをノックしてくれるというアナログ式です。しかも希望者にはその時にコーヒー(又は紅茶)を持参してくれるとは、なんとも洒落ているじゃないですか。私は目覚ましに携帯電話を使いましたので、このサービスを経験しませんでした。サービスを受けた同行者は感激していました。6時40分くらいに食堂に行き朝食をとり、午前7時半にはマイクロバス車で国立公園に向けて出発しました。まず国立公園の管理事務所に行き、登録手続きをします。管理事務所は塗られた外壁のペイントが真新しく建てられたばかりの感じでした。ゴリラの生態や国立公園について説明するDVDを観ながら登録手続きが終了するのを待ちました。それが終了すると、事務所の統括的な人から一般的な説明をしてもらい、その後各自が遭遇することになるゴリラ・グループ毎の説明と続きます。一つのゴリラ・グループには最大8名までのトレッカーが参加できます。ゴリラ家族を愛に怖がらせないようにとトレッカーは15歳以上という年齢制限があります。また、風邪をひいていたり、熱がある人も遠慮してもらうことになっています。ゴリラが感染しないようにとの配慮です。さて、我々のグループにはパークレンジャー2名が銃を持ち一行の前と後ろに付いてくれ、我々4名の日本人(後藤氏は既にゴリラとは何度も面会しているので、今回はロッジ

で休憩するとのことでした。)、添乗者のサミュエル、それに私達を取材するビデオカメラマンと写真家からなる構成です。

管理事務所から約28km離れたところまで車両で移動し、とある小川を渡ったところで降車しました。そこには30人くらいの地元の人が我々を待っていました。その中には女性も混じっていました。実は、2人の日本人男性は、体力に自信がないということで、公園関係者が言うところの「ヘリコプター」に乗って熱帯雨林に入っていく、ゴリラ家族がいる近くまで行き、そこから徒歩でゴリラ家族と対面するというのです。この「ヘリコプター」とは、実は竹で編んだ担架のようなものにマットレスを引いてその上に横になり、現地人が7~8人で担いでくれるものです。ただし交代しながら運ぶのでその倍の人間が必要となります。とても丁寧に運んでくれるので、両日本人男性は快適に移動出来て感謝していました。ただし、料金は1機当たり300米ドルとなっているそうです。とても高価ですが、なかなか行くことができないウガンダで日本の動物園はもちろんのことウガンダや近隣のルワンダ以外では見ることができないマウンテン・ゴリラに会いに行くのですから、それくらいは払う価値があるのではないのでしょうか。その他大きな荷物を持ってくれるポーターも雇うことができます。今回も日本人女性のリュックサックやカメラマンの大きなバッグをもってもらうために数人のポーターの手を借りました。日本人女性の方は、熱心なバード・ウォッチャーであり、日頃から自然に親しんでいるベテランで頑張り屋さんでもあるせいか、往復2時間くらいの道（あるいは道なき道）を歩き通した強者でした。恐るべき70代と彼女の強者ぶりに頭が下がりました。ただし、歩く速度は私に及ばず遅れ気味ではありましたが私の男性としての体力の面目躍如といったところです。



密林を下るヘリコプター



茶畑に行くヘリコプター

マイクロバスを降りたところから急斜面の熱帯雨林の中を30分程登り歩きそこを突き抜けて一度畑に出たところで一度小休憩し、再び熱帯雨林に入り下りつつ20分足らず歩いたところでグループはレンジャーの命を受け停止しました。嬉しいことにもう数分歩いて

行ったところにゴリラの家族がいるということなのです。「ヘリコプター」に乗っていた2名の男性もそこから降り、皆で最後の注意をレンジャーから聞きました。「どんなことがあっても慌てずに同行しているレンジャーに任せて落ち着いていること、それからゴリラの家族から7m以内には近づかないこと」ということが主な内容でした。ここからはカメラ以外の荷物は全部置いて日本人旅行者に添乗員のサミュエル、ビデオカメラマンと写真家、それにレンジャー2名の総勢9名が進んでいきます。希望を胸に歩いて行きますと、本当に5分も経たないうちにゴリラの家族と面会しました。そこにはゴリラを見張っていたもう一人のレンジャーもいました。我々が近づくとボス・ゴリラのシルバーバックが、そうなのですボス・ゴリラの代名詞シルバーバックが家族を守るという目的で我々を追い払おうとして威嚇しながら近づいてきました。少しびっくりはしたものの、銀色というよりは白い背中の本物のシルバーバックを身近に見て感激しながらもよく名付けたものだと思います。レンジャーがうまく追い返しますと、元いたところに戻り草をはむなどして寛いでいました。私達が危害を加えないと理解してくれたのでしょう。彼の周りには数頭の雌ゴリラが子供ゴリラと戯れていました。生まれて間もないと思われる赤ちゃんゴリラは眼がクリクリとしているのに加えてひょうきんで活発な動きをするので本当に可愛いと感じました。その場でカメラの前でインタビューに応え、写真を撮ってもらったりしながら、30分くらいゴリラの群れが寛ぐ風景を楽しんで過ごしました。すると、シルバーバックが移動を始め、他の家族メンバーも彼を追って奥の方へ動き出しましたので、我々もそれについていくことにしました。彼らが餌を食べていたところにはゴリラのウンチが残されていました。近くに寄って観察してみると人間のそれとそっくりでなるほどな～と思いました。



シルバーバックとその家族



ゴリラの赤ちゃん

そうしていると、私達がいたところから上の方から家族が去っていた方向に別の雄ゴリラが我々にかまうことなく通過していきました。レンジャーによれば群れの第2位ボスのゴリラだとのこと。さて、そうやって歩いて来ると小川が流れているところまで来まし

た。ゴリラは水が嫌いなのか、近くの木の上に登り枝を伝って向こう岸に移動していきました。そうこうしているうちに60分が経ち、ゴリラとお別れの時間となりました。そこから最終注意事項を受けた場所に戻り、ポーターや「ヘリコプター」担ぎと再会し、辿って来た道に戻り、往路に休憩をとったと同じところでお弁当を食べて腹ごなしをし、ちょうど食べ終わった頃にレンジャーから雨が降りそうだから先を急ごうと言われ、帰還の途につきました。というのもこの時期は雨季の真っ最中で雨が降ると熱帯雨林の中では地面がびちゃびちゃにぬかり歩くに歩けなくなるのですが、幸いにも雨に遭わずに車両のところまで戻ってこられました。そこでポーターや「ヘリコプター」人夫にチップを渡して帰還の途につきました。再び管理事務所に帰り、ゴリラ・トレッキングをした証明書を一人ひとりにいただき終了となりました。証明書はA4ぐらいの紙ですが、貴重な体験を行った証として思い出の一枚となりました。その後ロッジに戻ったところでスコールともいえる凄い雨が降ってきました。今回のゴリラ・トレッキングは、1時間もかからないうちにゴリラの群れと出会うことができ本物のシルバーバックと1時間も過ごせたこと、その上雨季の真ただ中にもかかわらずトレッキング中は雨に遭わずに済んで大変にラッキーでした。ロッジに戻るとすぐにスコールになったことは述べましたが、その激しい降雨さえ子守歌と聞きながら部屋でゆっくり休みました。午後7時からの夕食ではステーキを楽しみお腹いっぱいになり、トレッキングの疲れと満腹感で再びぐっすり眠ることができました。



ゴリラ家族を背景にしての筆者

22日(日)はやはり午前6時半過ぎに朝食をとり、荷物をまとめて午前8時にロッジを出発しました。帰りの飛行機便はキヒヒ発午後2時ということで時間がありましたので、その前にサミュエルが故郷のエイズ孤児の教育支援を行っているニヤカ小学校を訪ねました。藤枝市から来ていた人たちがサッカーボールや折紙用紙を子供たちに配って喜ばれていました。本物の折紙を初めて見た子がいたかもしれません。私も大使として子供たちに挨拶しました。小学校訪問の後は職業教育にも力を入れているニヤカ中等学校を訪れ校舎を視

察したところで時間になり飛行場に向かいました。飛行機は予定通り午後3時にはエンテベに到着し、4時過ぎには無事公邸に帰着しました。疲れからこの晩は早めに床に就き、ぐっすりと深く心地よい眠りにつきました。

マウンテンゴリラは、世界中でこのウガンダとルワンダとコンゴ(民)の国境が接した山岳地帯にしか住んでおらず、その数も880頭と絶滅の危機にあります。そのうちの半数くらいがウガンダにいると見積もられています(なお、国境に近い所のゴリラやこれら三か国の間を行き来しているので、どの国にいるかは正確なところはわからないというのが真相のようです。)。日本の動物園にいるゴリラはいずれもマウンテンゴリラではなく、ローランドゴリラという別の種類だそうです。ウガンダでは1993年くらいから政府がマウンテンゴリラの保護に乗り出し、この『ブウィンディ国立公園』はその重要性からもユネスコの世界自然遺産に指定されている貴重な国立公園なのです。ウガンダ政府は、マウンテンゴリラの保護のために近隣住民の生活との調和に気を遣ってきています。悲しいことに昔はゴリラの肉を食べると悪霊に取りつかれた病気が治ると信じられて、ゴリラが殺されたりしたらしいです。また、柵があるわけではないので、ゴリラが畑地に出没することもあるとのことでした。このようにゴリラが地域の住民に殺されないよう、教育宣伝を行うだけでなく、観光収入の25%は地域住民の生活・福祉に充てたり、近隣の住民が自然公園の仕事にできるだけ携われるようにしたり、前記の人夫やポーターとして雇い雇用促進に貢献しています。そして、仮に農作物に被害が出た場合にも被害額を全額補償するようにしているとのことでした。このように、ゴリラの保護と地域住民の生活を両立させるため、ゴリラ・トレッキングは必要な収入を得る糧となっています。1日に発給する国立公園への入園許可数はゴリラの家族毎に最大限8名に規制し、ゴリラと対面する時間も最大限1時間と決めマウンテン・ゴリラと自然保護に努めています。この自然保護の仕組みが維持されるよう観光客に来てもらいたいのが、ウガンダ政府の願いです。稀種のマウンテンゴリラと対面することのみならず、数少ない自然の熱帯雨林も経験できるのは観光面から考えると大きな魅力です。ウガンダにいるが故にこの『ブウィンディ国立公園』を自然保護の立場と観光の両面から経験出来て良かったと心の底から感じています。ただ、マウンテンゴリラの魅力に取りつかれ『ブウィンディ国立公園』を何回でも訪れたいというまでには惚れこむことはできませんでした。サミュエルなどはもう23回もゴリラと対面したことがあるのですが、飽きることはないと言っています。とてもそのような境地には到達できそうにもありませんが、マウンテンゴリラの魅力の一端を文字通り垣間見ることができました。このような生態系上貴重な存在となっているマウンテンゴリラを有する『ブウィンディ国立公園』を体験するとともにゴルフも楽しむ乙な旅を皆さんもしてみませんか。

(以上)